

第6章 民族をめぐる実践 - ブルガリアにおけるポマクの事例から -

松前 もゆる

はじめに

「ポマク (Pomak) とは如何なる人々なのか」ということは 19 世紀後半から今日に至るまでしばしば議論をされてきた。「ポマク」という名で呼ばれる人々は現在バルカン半島の 5 つの国々 - ブルガリア、ギリシャ、トルコ、マケドニア、アルバニア - に住んでいるとされ[Apostolov 1996:727]¹、彼らをブルガリア語もしくはそれと同じ言語グループに属するようなスラヴ語の 1 つを話すムスリムとして捉える点では一致しているものの、その言語的位置づけや民族起源には国や地域、立場によって相違があり、ひとつの解を見いだすことは難しい。例えば、「ポマク」と呼ばれる人々の大半が居住するブルガリアでは「ポマクはオスマン帝国時代にイスラームへ改宗したブルガリア人である」との見解がごく一般的であるが、ギリシャにおいては「周囲のスラヴ系住民との交流過程でギリシャ語を忘れスラヴ語のみを話すようになったギリシャ人の末裔」との説もあり、また、バルカンへ移住してきた時点でムスリムであったトルコ系民族の子孫とする考え方もある²。

しかし、このような論争自体、後述するような近代国民国家形成の過程で生みだされたものである。19 世紀以降バルカン諸民族は政治的独立を獲得する中で文化的に等質な民族、ネイション³の形成を目指した。その際それぞれの事情に従い、民族を決定する要素として

¹ Apostolov によると、現在「ポマク」と呼ばれる人々は、ブルガリアに 15～20 万人、マケドニアに 4 万人強、ギリシャに 36,000 人程度居住すると推定される。アルバニアのポマクについてはその数の把握が難しく(8～12 万人の間)、また、トルコには東トラキアのスラヴ系ムスリムや 20 世紀になってトルコへ移住したポマクが住む[Apostolov 1996]。その他、ブルガリアのポマクに関してその数約 25 万人とする資料もある[Todorova 1997:71]。

² ブルガリア、ギリシャ、トルコ各国の研究者及びポマク自身が語る民族起源論を比較したものに Balicki[1999]がある。

³ ネイションが、日本語で言うところの「民族」「国民」「国家」といった複合的な意味合いを兼ね備えた分析概念であり、この 3 者が理念的に合致した国民国家を目指す動きこそがナショナリズムであるという大塚[2000:88-89]の議論はこのケースの場合も示唆的である。文化 - この地域の場合主に言語と宗教 - を共有すると考えられたブルガリア・ネイションが、国家形成の過程で「ブルガリア」民族、国民、国家を合致させることを理想とした際、周辺諸国家との関連の中で、ブルガリア語を話すムスリム「ポマク」の存在が問題として顕在化したのである。

言語や宗教の同一性を選択したが、結果、領域内のムスリム、殊にポマクのようにトルコ語を解さず、周囲のキリスト教徒と同じ言葉話すムスリムをどう位置づけるかが大きな問題となっていったのである。

本論文では、まず、こうした歴史的経緯の中でブルガリアのポマクが如何に位置づけられてきたかを、国勢調査や統計資料、住民登録を基に検証する。次に、ポマク自身や周囲の住民が、民族及びポマクに関して実際にどのように語り、そして行動しているかに話を進める。そして、これら国家、地方行政、日常生活、各レベルでのポマクに関する言説、行動を民族をめぐる実践として捉え、対照・比較することで、最終的にそれらの関連及びズレを明らかにすることが本論文の目的である。こうした作業は今一度民族概念を捉え直す作業に通ずるものと考えている。

1. ブルガリアにおけるポマク - 歴史的背景と国家政策

「ポマク」という呼称は、ブルガリアの啓蒙家 Vasil Aprilov が 1841 年その著作で初めて記録したとされる[Rajčevski 1998:15]。そこで彼は「すべてのトルコ化した同胞をブルガリア人はポマクと呼んでいる」と書いている。その後民族解放のイデオログ Karavelov も、1860 年代の出版物のなかで、彼らの話し言葉がトルコ語やギリシャ語の影響のない「純粋な」ブルガリア語であり、その歌謡、習慣などからもポマクはトルコ化したブルガリア人に他ならないとした。そして、彼らが周辺のキリスト教徒と同様の祭日も祝っている事実を指摘して、「ポマクがモハメッド教を受け入れたのはそう昔のことではない」[Karavelov 1984:377]と結論づけている。こうした記述は、その著者が啓蒙家であることから見ても、

ただし、本論文の主眼は、そうして顕在化したポマクが存在をめぐって実際にどのような言葉で民族が語られ実践されてきたのかに着目し、それを記述することにある。従って、現地の用語により注意を払い、必要に従ってブルガリア語の表現を併記する。

これと関連してあらかじめブルガリア語の基本的な用語について触れておく。*narodnost* とは「歴史的に創造された言語的、領土的、経済的、文化的共同体。*nacija* に先立つ。...こうして形作られたブルガリア *narodnost* は中世を通じて、後にブルガリア *nacija* の基礎となるブルガリアの特徴を保持するようになった。」[BAN 1999:715]とされ、一方 *nacija* は「歴史的共同体。領土や経済生活、書き言葉、文化や精神面でのエスニックな特徴、の一致の上に形成される。...ブルガリア *nacija* は 18~19 世紀に形成された。」[BAN 1999:720]と定義されている。ただ、本文中で見ると、民族帰属を問う際には主に *narodnost* が用いられてきた。

当時オスマン帝国の統治下にあったこの地域で高まっていたブルガリア正教会独立運動⁴、その後の民族解放運動と不可分である。ブルガリア人を他の民族から判別する指標とされた言語が重要視され、そして「純粋な」民族文化を残していると考えられた歌謡、フォークロアが注目された。まさにこれらの共通性、類似性を根拠として、彼らがブルガリア人でイスラーム改宗以前はキリスト教徒（東方正教徒）であったと判断されたのである。

やはり同時期に、ポマクに関連して興味深い記述がなされている。著述家 Gerov は友人にあてた手紙の中で、ポマクはブルガリア人ムスリムであるが、「ポマクが未だ民族（*narodnost*）を宗教と区別していない」と指摘した[Petrov 1972:395]。Gerov はその理由をポマクの後進性に求め、続けて「民族という考えはこのように速く広まっているので、ポマクの間にも近い将来浸透するかもしれない」と述べている。ここから、当時比較的新しかった民族という概念が、少なくともポマクの事例に関してはしばしば宗教的帰属と区別せずに用いられ、それは同時代の啓蒙家達からすると「誤った理解」であったことが伺える。

1878年のブルガリア公国成立により、ブルガリアはオスマン帝国からの分離、政治的自治を獲得した。他のバルカン諸国と同様、近代国家の成立はこの地域のムスリムの立場に大きな変化をもたらすことになる。各国は民族的宗教的に同質な国民国家を理想とし、数度の住民交換を通じてそれが達成できないと、マイノリティ問題に対し移住や同化政策を実施した。同時に、こうした政策実施や中止には各国間の関係や領土問題が深く関与していたと考えられる。近年の研究では、ブルガリアで1912-13年に行われたポマクのキリスト教への改宗運動とバルカン戦争 ポマクが多数居住するロドピ地方がブルガリアの領土となった - との関連、あるいはロドピ地方及び隣接する西トラキアでのギリシャ - ブルガリア間の領土問題とポマクに対する啓蒙活動の結びつきが指摘されている[Lozanova 1998; Büchschütz 2000; Velinov 2000]。

ただし、ブルガリアにおいてポマクに対する見方は Aprilov や Karavelov から大きく変化したわけではない。19世紀末以降「ポマクがいつ如何なる理由からイスラームに改宗したのか」を考察する歴史研究が幾つもなされたが、そうした議論も「彼らはその言語、民族学的特徴 - フォークロアや歌謡、祭日 - 故にブルガリア人である」ことを前提としていた。そして、まだポマクたちはその事に気がついておらず、従ってそのブルガリア人としての民族性を自覚すべき存在と考えられていた。1930年代から公式には「ポマク」に代わって「ブルガロ・モハメダニ」という呼称が用いられるようになったのもそうした考え方を反映していたと言えるであろう。

共産党政権の対ポマク政策に関しても、Neuburger も指摘する通り、その方向性に变化

⁴ 18世紀以来東方正教会の宗教共同体（ミット）内部で起こっていたギリシャ化に対抗し、ブルガリア教会の世界総主教座からの独立を求めた運動。1870年にブルガリア総主教代理座が正式にオスマン政府から承認された。

はなかったと言える[Neuburger 2000]。1949年政治局によって「ブルガロ・モハマダニはブルガリア民族 (*bălgarski narod*) の一部であり、強制的にトルコ化された」との表明がなされ、今なお貧しいポマク居住地域での生活及び教育水準の向上が目標とされると共に、アカデミーと協力したポマクのブルガリア民族性を遡る研究も始められた。1970年代以降は、ポマクは強制的なイスラームへの改宗以前の状態に戻るべきだとする考えに基づき、トルコのイスラーム的名前の改名⁵、儀礼への規制、衣装(ヴェール、シャルヴァリというもんぺ状のズボンなど)⁶の着用禁止が実行に移されていった。

2. 民族を数える - 統計に見るポマク

ブルガリア公国成立から今日まで国家が民族、そしてポマクをどう扱ってきたか、ここでは国勢調査や統計を例に概観してみたい⁷。

第1回目の国勢調査は1880年に行われた。その後5~10年ごとに実施されているが、1888年までの国勢調査ではポマクは「トルコ人」に含まれたとされる[Todorova 1997:64]。ただし、1888、及び1892年の調査結果を示した冊子には民族帰属別の統計は見えない。項目としてあがっているのは宗教 (*veroisповедание*)、母語 (*materen ezik*)、国籍 (*poddanstvo*) である。1900年の全国調査結果では民族 (*narodnost*) の項目が現れるが、記された民族名の中に「ポマク」はない。1905年の同結果では「ポマク」についての言及が見られ、縦に信仰する宗教名を、横列に母語別の人数を示した表に関する説明の中で、母語はブルガリア語でムスリムであるポマクのような存在を「ブルガリアの住民のあるエスニックな要素 (*etničeski elementi*) として」[GDS 1911:XX]把握することができるとしている。ただ、この時民族を「ポマク」と記入した調査票があり、調査結果としてはその数を「ブルガリア人」に含めて示していたらしいことは、1909年の統計年鑑と見比べると推察できる。こちらには民族「ポマク」として独立した数字を示す欄があるからである(表1、表2参照)。

⁵ トルコの、イスラーム的とされた名前をスラヴ、ブルガリア風に改めさせた(例: Asan から Asen、Mahmud から Marin や Mihajl など)。自主的に改名した人もいたが、一定期間に強制的な改名も実行された。尚、一般的に人々はかつての名前を「トルコ名 (*tursko ime*)」と表現し、新しい名前を「ブルガリア名 (*bălgarsko ime*)」と言う。

⁶ ポマクの衣装に関しては拙稿[2000]を参照されたい。

⁷ 1878年に成立したブルガリア公国の領土は現在のブルガリア北部に相当する。その後1885年に東ルメリアと呼ばれた地域を併合、また、1913、1919年にも領土変更が行われた。現在の国境線が確定したのは1940年である。従って、国勢調査や統計における数値の変化には注意が必要である。国境線については伊東他[1993:777]等を参照。

表1 1905.12.31 付国勢調査結果

民族	住民
ブルガリア人	3,203,810
トルコ人	488,010
-	-
計	4,035,575

[GDS 1911:18]より作成

表2 1905年国勢調査に基づいた民族別人口

民族	住民数
ブルガリア人	3,184,437
ボマク	19,373
トルコ人	488,010
-	-
計	4,035,575

1909年統計年鑑[GDS 1910:42]より作成

一方、調査結果としてはやはり独立した民族としては提示されていないものの、続く1910年の国勢調査では、調査票の説明に「質問7 この質問には本人が生まれ、出自の上で如何なる民族 (*narodnost*) であるか答えること (ブルガリア人、トルコ人、ユダヤ人、ギリシャ人、ロマ、ボマク、ツィンツァリ⁸、ガガウズ⁹等)」[GDS 1923:XLVIII]とあり、民族の1つとしてあげられている。

その後も1920、1926年に国勢調査が行われ、民族別の人口が調べられるが、「ボマク」は「ブルガリア人」に含まれて示されていた¹⁰。ただ、同時期の統計年鑑には、国勢調査結果に基づく民族別人口を示した中に民族「ボマク」の欄が別箇にあり、30年代になると「ブルガロ・モハマダニ」として示される。従って、1926年の国勢調査の結果までは「ボマク」と呼ばれる人々の数が統計上把握できるのである¹¹。ところが、その後30年代末になると、統計年鑑にも「ボマク」「ブルガロ・モハマダニ」という独立した欄はなくなっていく。

しかし、社会主義時代最初に行われた国勢調査(1946年)でも、民族の質問に対し、「ボマク」あるいは「ブルガロ・モハマダニ」と答えた人々がいたことは確かである。民族帰属別の人口統計は1970年に同国政調査結果の第2巻として刊行されたが、その但し書に「ブルガロ・モハマダニもブルガリア人に加えた」[CSU 1970:5]とある。

⁸ ルーマニア語の一方言を話す人々。「主としてマケドニア地方に散住する」[Andrejčin et al. 1976:1040]。萩原によると、ツィンツァリとはセルビア語ではアルーマニア人(ルーマニア語の一方言アルーマニア語を話すバルカンのエスニック・グループ)に対する蔑称である[萩原 1993:17-18]。

⁹ トルコ系の東方正教徒。

¹⁰ 村ごとの人口を示した冊子では、民族「ボマク」という独立した欄はないが、村の「ブルガリア人」のうち何人が「ボマク」なのか、但し書に記されている。GDS 1929など参照。

¹¹ 統計年鑑によれば1926年の民族別人口は「ブルガリア人 4,455,355人、ブルガロ・モハマダニ 102,351人」で、ブルガロ・モハマダニの全人口に占める割合は1.9%であった[GDS 1936:25]。尚、1926年の国勢調査結果ではブルガリア人4,557,706人とある[GDS 1931:16]。

一方、1956年の調査者への注意書¹²には、以下のような記述が見える。「質問8：民族 *nacionalnost* (*narodnost*) 宗教と混同してはいけない。イスラーム教徒が皆トルコ人ではない(例：ブルガロ・モハメダニ)。今回の調査では市民は個人の宗教は問われない。しかし、自分の民族として『ブルガロ・モハメダニ』を指示する者は、そのように記入されなければならない。」[CSU 1960:XII]ただ、公表された結果を見る限り、民族帰属別の統計に「ブルガロ・モハメダニ」という欄はなく、民族としてあがっているのは、ブルガリア人、マケドニア人、トルコ人、ロシア人、ロマ、アルメニア人、その他、である。「ポマク」や「ブルガロ・モハメダニ」と答えて「その他」に数えられた人々もいるだろうが、筆者の調査した村を含む当時のテテヴェン郡 (*okolija*) に関しては「ブルガリア人 36,950人、トルコ人 1,766人、ロシア人 12人、ロマ 534人、その他 14人」[CSU 1960:347]という結果が掲載されており、ポマクはブルガリア人もしくはトルコ人として数えられていると考えることができよう¹³。

この後、1965年、1975年の国勢調査でそれぞれ民族(*narodnost*)が問われているが、結果の上で「ポマク」や「ブルガロ・モハメダニ」に言及されることはない。また、1985年の調査では、民族についての質問はなされていない。

さらに、社会主義体制崩壊後に実施された1992年の国勢調査では、エスニック・グループ (*etnička grupa*) が問われたが、「ポマク」や「ブルガロ・モハメダニ」がその1つとしてあがることはなかった。次に見るように社会主義時代を通じてポマクたちは「ブルガリア人」として登録されてきたし、この調査においてもポマクの大半は自分たちを「ブルガリア人」と答えたと思われる。一方、ポマクという独立したカテゴリーが省略された結果、相当数のポマクが自身をトルコ人と登録したとの指摘もあり、調査自体の信頼性を問う議論も起こっている[Todorova 1997:70]。いずれにしても、現在ポマクの数には統計上把握することはできず、研究機関、個々の研究者が推定するのみである。

¹² ブルガリアの国勢調査の手法としては、調査票を予め各戸に配り記入後回収する方式と調査者が各戸を訪問し、本人に質問をしながら調査票を埋めていくアンケート方式の2つがあり、かつては両手法が併用されていたが、1956年以降はアンケート方式で行われている[BAN 1986:415]。

¹³ 北ブルガリアのポマクは「ロヴェチ地方のポマク (*Lovčanskite/Loveškite pomaci*) 」とも呼ばれてきたが[Miletič 1899, Savov 1931, Lory 1993]、現在は中でもテテヴェン郡に集中しており、ガラタ Galata 村、グログヴォ Glogovo 村、グラデシニツァ Gradešnica 村、バーピンツイ Babinci 村にはほぼポマクのみが、ブルガルスキ・イズヴォル Bălgarski izvor 村とキルチェヴォ Kirčevo 村(1979年よりウガルチン Ugărčin 郡)ではブルガリア人正教徒とロマと共に暮らしている。1956年当時、これらの村々の人口から考えてテテヴェン郡には5,000人程度のポマクが居住していたと推測される。現在その数は7,000~8,000人程であると思われる。

3. 民族を記入する

3.1 届出に記入された民族

次に、村の行政機関、役場で民族がどのように記入されてきたかを見てみよう。筆者が調査をしたブルガリア中北部、ウガルチン Ugărčin 郡キルチェヴォ Kirčevo 村¹⁴に関しては、1898 年からの出生、婚姻、死亡届を古文書館で閲覧することができる¹⁵。また、1911 年以降は基本的に村役場で保管されている。

これらの史料をひもといていくと、以下のようなことが分かってくる。まず、1898 年までは全て手書きで、本人や父母の姓名の後に「ムスリム」、あるいは「ブルガリア人」とある。つまり、ムスリムという本来は宗教的帰属が、ここではブルガリア人に対応する個人の帰属として記されている。

その後 1899 年～1908 年までは記入項目が印刷されており、そこへ書き込む形式となる。届出用紙には姓名、信仰 (*vjara*)、民族 (*narodnost*)、国籍 (*poddanik*) をそれぞれ記入する欄がある。この間、民族名には混乱が見られ、例えば 1899 年には信仰の欄にムスリムとあればほとんどの人が民族欄に「トルコ人」と記しているのに対し、翌年になると民族欄にも「ムスリム」と書かれている届出が急増する。1908 年になると、上述の民族名の他に、ムスリムで民族欄に「ブルガリア人」とある者や「トルコ人 - ポマク」のようにトルコ人とポマクを併記した者も現れる。

1909～1929 年までは再び全文が手書きになっており、民族帰属らしきものは記入されていない。いずれの届出においても予め宗教儀礼を行なったことが書いてあるので、そこから宗教的帰属を読み取ることはできる。

1930 年に再び印刷形式に戻ると、民族の欄には「ポマク」という記入が増える。また、1930 年代の半ばから、「ブルガリア人 - ポマク」とブルガリア人とポマクとの併記形式が増加する。

以上からある程度推測できることは、公国成立後も特にポマクの間では宗教的帰属と民族的帰属とが同一視され、民族名等も混乱していたということである。同じ村に住むブルガリア人キリスト教徒の場合、届け出用紙が印刷形式になると、信仰「正教」、民族「ブルガリア人」と記入されている。ただ、これらの登録が村の役場で行政官によって書き入れ

¹⁴ キルチェヴォ村はオスマン帝国時代にはポマクのみが居住する村だったとの記録があるが、帝国からの分離後近隣村からブルガリア人正教徒が移住した。現在はポマク、ブルガリア人正教徒、ロマが居住。1999 年末の人口は約 1,300 人。

尚、本論文で扱った資料は、1996 年 9 月～1999 年 1 月及び 2000 年 4 月～8 月にこの地域(キルチェヴォ村及びテテヴェン郡ガラタ村、グラデシニツァ村)で行なった調査に基づいている。一部調査の実施にあたっては、トヨタ財団の研究助成を受けた。

¹⁵ DA(Dăržaven Arhiv)-Loveč, s.Kirčevo, Registăr

られたことに注意を払わなければならないにせよ、少なくとも地方行政のレベルでは次第に宗教とは別の民族という概念の存在が浸透し、一方でポマクはブルガリア人であるという考え方が広まりつつあったものと思われる。

3.2 社会主義時代の住民登録

キルチェヴォ村役場には、1947年に作られた住民台帳が保管されている。これは戸別に作成され、家長を筆頭に一戸に住む全員の姓名、生年月日、学歴とともに、宗教 (*veroisповедanie*) と民族 (*narodnost*) が記入されている。これはほぼ10年に一度作り替えられたらしく、次が作られる1956年まで補足・訂正しつつ、使用されたい。この台帳での民族帰属を見ると、宗教欄に「ムスリム」とある場合、「ブルガリア人」あるいは「ブルガリア人(ポマク)」と書かれている例がほとんどである。トルコ人はわずかで、ロマも少数見受けられる。一方、1956年になると、併記という形式であってもポマクを民族名として記入する者はいなくなり、この村にはブルガリア人、ロマ、ごく少数のトルコ人が住んでいるということになる。宗教帰属を記入する欄もなくなっている。ところが、その台帳の裏表紙を見ると、「1962年10月13日現在の人口」として「ブルガリア人357人、ポマク796人、ロマ165人」と書かれてもいるのである。

ポマクはブルガリア人の一部であり、「ポマク」あるいは「ブルガロ・モハメダニ」は独立した民族になり得ないとする公の方針に沿って、書類上からは次第に「ポマク」「ブルガロ・モハメダニ」という言葉が消滅していった。そして大多数の場合ポマクは「ブルガリア人」に内包されていったが、この台帳の裏書きから見ても明らかなように、村の中の対面状況においては「ポマク」であることは意味を持っていて、それは「ブルガリア人」とは区別されていたのである。このことは後でもう少し詳しく見てみたい。

3冊目、1968年に作られた住民台帳は、その数年後に改名政策が実施されたため、姓名が朱筆で訂正されているページが数多くある。ただ、この時期に改名をした人々はポマクもしくはムスリムのロマであったと考えられるが、民族欄に「ロマ」という記入はあっても、「ポマク」が独立した民族として現れることはない。また、そこに書き込まれた年月日を見ると、この村では1972年夏に大多数の人が改名している。

この台帳の後、1978年から登録が個人カード式に変更され、現在に至っている。そこには市民権 (*graždanstvo*) を書き込む欄はあるが、民族について記入する欄はない。また、社会主義政権崩壊後も人々は以前と同じIDパスポートを所持していたが、2000年中に新しいIDカードへ切り換えられることになり、そこに民族記入欄がないことが村で話題となっている。

4. 村の中の民族

村で調査をしていて、「我々はポマクである」という言葉をしばしば耳にする。調査者である筆者に向かってそのように説明する人もいるし、祭りの日のステージ上でマイク片手にそう熱唱した若者もいた。ただ、これには2通りの続きがあって、「そして、ブルガリア人だ」と言う場合と、「ブルガリア人でもトルコ人でもないから（ポマクだ）」と続く場合とがある。前者の場合、彼らは自分たちがブルガリア語を話し、トルコ語を全く知らないことを理由としてあげる。「ポマク」というのはブルガリア人の中の「ショピ＝ソフィア地方の人々」と同等の民族学的分類、民族の下位分類だと説明する人もいる。他方、後者はトルコ語を知らないからトルコ人ではないという考え方は同じでも、ムスリムであるためブルガリア人に内包されない、時として「純粋な」ブルガリア人ではない、と考える。

ここで言語と宗教という2つの事柄が問題となってくる。先に述べた通り、ブルガリアでは言語を民族識別指標の第一とし、従ってポマクはブルガリア民族の一部であるとしてきた。そのためトルコ語を話さない彼らはトルコ人ではない。しかし同時に、歴史的経緯からブルガリア民族とブルガリア正教は深く結びつけて考えられてきた。宗教は明らかにもう1つの民族の指標として機能しており、ブルガリア正教徒でない以上、彼らは（純粋な）ブルガリア人ではないのである。

事例1 [30代女性、ポマク]

「私たちはブルガリア語を話すんだからブルガリア人よ。トルコ語を知らないからトルコ人とは言えない。」

事例2 [40代男性、ポマク]

「我々はポマクだけど、ブルガリア人だ。昔は『トルコ人』と呼ばれていたが、我々はトルコ語を知らない。ブルガロ・モハメダニでもなく、ブルガリア人そのものなんだ。パスポートにも『ブルガリア人』と書いてある。」

事例3 [40代女性、ポマク]

「ポマクっていうのは、私たちはトルコ人でもないしブルガリア人でもないってことなのよ。」

事例4 [60代男性、ポマク]

「ポマクはトルコ人ではない。何故ならトルコ語を知らないから。」

「しかし、ポマクは *pomāčeni bālgari* (= 苦しめられたブルガリア人)¹⁶ であるとは自分は考えていない。幾つかの村だけ(苦しめられてイスラームへ)改宗するなんてありえないだろ？ポマクは別のエトノスなのだ。」

以上、キルチェヴォ村での会話から、ポマクとその民族性に関して異なった主張をしている言説を幾つかとりあげてみた。これらから明らかになるのは、まず、人々の間で言語に基づいた民族の捉え方が浸透しているということである。人は何らかの民族に帰属し、その客観的な指標として言語があるという知識を現在の彼らは持っている。一方でその知識を基にしたポマクの位置づけは今も不安定で、様々な理由づけを行いつつ確かな位置を得ようと模索している。本論文の最初に記した民族起源論もその1つの現れなのである。

19世紀から20世紀にこの地域で形成された言語、そして宗教を基準とした民族概念は、特に「ブルガリア」と「トルコ」の名を冠した国民国家の成立及びその領域内に同質なネイション(国民・民族)を求める動きが、結果的にポマクを「ブルガリア人」と「トルコ人」の間に置いた。だから人々は2つの民族(ネイション)との関係でポマクを位置づけようと試みてきたし、また、自らがブルガリア人である/トルコ人であると表明する際にも理由づけを必要としてきた。ここにポマク自身、少なくともその一部の人々が共有する民族概念と現状とのズレが浮び上がってくる。

これらの言説をうけてポマクたちが日常どのように行動しているかについて、最後に少し触れておきたい。1970年代前半の改名政策の結果、現在30歳より上の人たちはほとんど2つの名前を持っている。生まれた時につけられた彼ら曰くの「トルコ名」と、改名後の「ブルガリア名」である。社会主義体制崩壊後かつての姓名へ戻すことが認められたが、キルチェヴォ村では書類上トルコ名に戻した人はほとんどいない。また、新しく生まれてくる子どもに対してもブルガリア名をつけ、トルコ名をつけることはない。これに対しては、「自分たちはブルガリア人だから」とその理由を説明する人もいるし、「そうすればポマクと判らない」「(我々は)ブルガリア人と何の変わりもない」ためだというような表現をする人もいる。

事例5 [60代女性、ポマク]

「親しい人たちの間では昔の名前で呼び合うけど、パスポートの上ではブルガリア名を使っている。そうすればポマクとは判らないから。」

¹⁶ 「ポマク」という呼称の語源に関しては様々な説があり、定説はない。ただ、Aleksiev[1997]の指摘するように、オスマン帝国時代には“*pomagač*” (*v osmanskata vojska*)、つまりオスマン帝国軍を「助ける人」という言葉に由来するという説を唱える者が多かったが、その後“*pomāčen*” (*pri nasilstvenoto nalagane na isljama*)、イスラームの強制により「苦しめられた」、に由来するという考え方が一般的となった[Aleksiev 1997: 61]。

実際 30 歳以上の人の多くは 2 つの名前をどちらも使い続けている。ポマク同士では勿論のこと、共に暮らすブルガリア人キリスト教徒も - 若い世代を含めて - 彼らのトルコ名とブルガリア名の双方を知っており、その時々で 1 人の人物をトルコ名で読んだりブルガリア名で読んだりする。上の事例のように年輩者同士ほとんど昔の名前 = トルコ名が使われる場合もあるし、専らあだ名で呼ばれる人もいる。一方、トルコ名とブルガリア名が双方繰り返し用いられ、その使い分けにそれ程意識が払われることはないように思われる例も複数ある。

ポマクたちにとって民族はしばしば外側から決められるものである。「我々はトルコ人、ブルガロ・モハメダニ、そしてブルガリア人と言われてきた / (パスポートに) 書かれてきた」「(ID カード発行前に) 今度はカードに何民族と書かれるのだろうか」等々。これは一見民族の選択権を放棄した消極的な行動にも思えるが、彼らにとってそうした選択は「政治的」で生活世界の外部に位置すると言えるのであり、むしろ重要なのは日常における選択、例えばパスポートの上ではブルガリア名を使いつつ、対面状況で昔のトルコ名で呼びかけられることなのである¹⁷。

事例 6 [80 代男性、ポマク]

「ポマクをトルコ人と呼んだりブルガリア人と読んだりする呼び名の変化は、結局政治的なものなんだ。」

結語

同じ様にポマクと呼ばれていても、その帰属意識の多様性、多層性は昨今指摘されるところである[Karagiannis 1999; Konstantinov 1997; Neuburger 2000; Todorova 1997]。世代、居住する共同体、そして個人個人によって民族帰属意識は様々であるし、また、1 人の人物の中でもオフィシャルな言動と日常生活には矛盾もある。その諸相を分析していくと、経済的・社会的動機づけ、宗教的要因、外交上の動き等によって形成される帰属意識の動態のようなものが見えてくる。無論それはポマク特有の事柄ではないであろう。ただ、これまで見てきたようなポマクを取り巻く歴史、環境がそれを際立たせているだけなのである。

民族という絶対的な概念が存在し、その判別には客観的指標があるという考え方は、近代化、国民国家形成の過程で形作られてきた。しかし、概念と現状との間にはズレがあり、

¹⁷ 一方、双方の名前を使用し続ける行為が、時にブルガリア人(正教徒)との差異、改名政策及びその対象となったポマクとしての自分、「我々」を想起させる装置となっていることには注意が必要であろう。周囲のブルガリア人正教徒やロマとの双方向の位置づけ、及びその中での 2 つの名前を持つ身体と帰属意識、といった問題に関しては別稿を準備する予定である。

それに対応すべく人々は様々な選択、実践を行ってきたと言える。一方でそうした民族概念は徐々に浸透し、人々は絶対的な民族が存在すると信じ、自らをそのいずれかに位置づけようと試みてきた。ブルガリアにおけるポマクの民族をめぐる実践からは、こうした概念の浸透及びその概念（に基づいた言説）と現状とのズレ、そしてそれを埋めようとする人々の対応の諸相が明らかになってくるのである。

[引用文献]

Aleksiev, Božidar

- 1997 “Rodopskoto naselenie v bălgarskata humanistika” In A. Željzkova (ed.) *Mjusjulmanskite obštosti na Balkanite i v Bălgarija: Istoričeski eskizi*, pp.57-112. Sofia: Mejdunaroden centăr po problemite na malcinstvata i kulturnite vzaimodejstovija.

Andrejčin, L., L. Georgiev, St. Iliev, N. Kostov, Iv. Lekov, St. Stojkov, and Cv. Todorov (eds.)

- 1976 *Bălgarski tălkoven rečnik* (treto izdanie). Sofia: Nauka i iskustvo.

Apostolov, Mario

- 1996 “The Pomaks: A Religious Minority in the Balkans”, *Nationalities Papers* 24(4), 727-742.

Balikci, Asen

- 1999 “Pomak Identity: National Prescription and Native Assumption”, *Ethnologia Balkanica* 3, 51-57.

BAN (Bălgarska akademija na naukite)

- 1986 *Bălgarska enciklopedija*. T.5. Sofia: BAN.
1999 *Bălgarska enciklopedija*. Sofia: ID “Trud”.

Büchschütz, Ulrich

- 2000 *Malcinstvena politika v Bălgaria*, translated by Ivo Georgiev. Sofia: Mejdunaroden centăr po problemite na malcinstvata i kulturnite vzaimodejstovija.

CSU (Centralno statističesko upravlenie)

- 1960 *Prebrojavane na naselenieto i žilištinja fond kăm 1. 12.1956*. kn.I. Sofia: CSU
1970 *Rezultati ot prebrojavane na naselenieto v Narodna Republika Bălgarija na 31.12.1946*. kn.II. Sofia: CSU.

GDS(Glavna direkcija na statistika)

- 1910 *Statističeski godišnik na Bălgarskoto carstvo 1909*. Sofia: GDS.
1911 *Obšti rezultati ot prebrojavane na naselenieto v Carstvo Bălgarija na 31.12.1905*. kn.I. Sofia: GDS.

- 1923 *Obšti rezultati ot prebrojavane na naselenieto v Carstvo Bălgarija na 31.12.1910.* kn.I. Sofia: GDS.
- 1929 *Rezultati ot prebrojavane na naselenieto v Carstvo Bălgarija na 31.12.1920. po obštini i naseleni mesta. X. Okrăg Plevén.* Sofia: GDS.
- 1931 *Obšti rezultati ot prebrojavane na naselenieto v Carstvo Bălgarija na 31.12.1926.* kn.I. Sofia: GDS.
- 1936 *Statističeski godišnik na Bălgarskoto carstovo 1936.* Sofia: GDS.
- 萩原直
- 1993 「アルーマニア人」伊東孝之他編 『東欧を知る事典』 pp.17-18, 東京：平凡社。
伊東孝之、直野敦、萩原直、南塚信吾編
- 1993 『東欧を知る事典』 東京：平凡社。
- Karagiannis, Evangelos
- 1999 “An Introduction to the Pomak Issue in Bulgaria” *In and Out of the collective 2*
- Karavelov, Ljuben
- 1984 *Săbrani săčinenija* T.4, Sofia.
- Konstantinov, Yulian
- 1997 “Strategies for Sustaining a Vulnerable Identity : The Case of Bulgarian Pomaks”, In Hugh Poulton and Suha Taji-Farouki (eds.) *Muslim Identity and the Balkan State*, pp.33-53. London: Hurst & Company.
- Lory, Bernard
- 1993 “Edna zabravena mjusjulmanska obštност: Lovčanskite pomaci”, translated by M. Karamihova and P. Bankova. *Bălgarska etnografija* 4(2):71-88. (“Une communauté musulmane oubliée: Les Pomaks de Lovec”, *Turcica Revue d’Études Turques* XIX, 1987)
- Lozanova, Galina
- 1998 “Sakralna sreštu realnata istorija na bălgarite mjusjulmani v Rodopite” In R. Gradeva and S. Ivanova (eds.) *Mjusjulmanskata kultura po bălgarskite zemi*, pp.451-463. Sofia: Mejdunaroden centăr po problemite na malcinstvata i kulturnite vzaimodejstovija.
- 松前もゆる
- 2000 「キリスト教とイスラーム教の接点 - ブルガリアの場合 - 」 『季刊リトルワールド』 73:5-10.
- Miletič, L.
- 1899 “Loveškite pomaci” *Bălgarski pregled* 5(5): 67-78.
- Neuburger, Mary
- 2000 “Pomak Borderlands : Muslims on the Edge of Nations” *Nationalities Papers* 28:1:181-198.

大塚和夫

2000 『イスラーム的：世界化の時代の中で』東京：日本放送出版協会.

Petrov, Petăr

1972 *Po sledite na nasiliето*, Sofia.

Rajčevski, Stojan

1998 *Bălgarite Mohamedani*. Sofia:Univ. of Sofia.

Savov, V.

1931 “Lovčanskite pomaci i tehniija govor” *Izvestija na seminara po slavjanska filologija pri Sofijski universitet* 7:1-34.

Todorova, Maria

1997 “Identity (Trans) Formation among Pomaks in Bulgaria” In Laszlo Kürti and Juliet Langman (eds.) *Beyond Borders: Remarking Cultural Identities in the New East and Central Europe*, pp.63-82. Boulder: Westview Press.

Velinov, Aleksandăr

2000 “Aspekti na bălgarska politika sprjamo bălgaromohamedanite (1912-1944)” *Istoričeski pregled* LVI(1-2): 134-150.